

優秀賞      東京都      阿部 寿人 様      (60 代)

私が眼の異常に初めて気づいたのは、交通事故がきっかけだった。50 歳を目前にしたある日の夜、合流レーンから本線へ進入しようとした際にすぐ横を並走していた車に気づかずに接触してしまったのだ。お互い怪我がなかったのが幸いだったのだが、私は相手の車が全く見えていなかったことがショックだった。進入時たしかに確認したはずなのに。

心配になり近くの眼科を受診すると、大きな病院で精密検査を受けた方がいいと言われ紹介状を渡された。これはただ事ではないと大きな不安を抱えながら紹介された病院で検査を受けた結果、医師から告げられた病名は「網膜色素変性症」。

周辺の視野が徐々に欠落していく進行性の難病で、最悪の場合失明してしまうこともあるらしい。ただ、進行の度合いはかなり個人差があるので、定期的に検査をして様子を見ていまいしょうと医師から言われた。

今まで大きな病気をしたことがなく、仕事も生涯現役を目標にしていた私にとって受け入れ難い事実だった。もし失明したらどうしよう……そんな恐怖が先に立った。

その後も定期的に検査を受けるたびに、周辺部にぼつぼつと島状にあった視野が無くなっていった。そして 5 年を過ぎた頃から歩いている人や足元の障害物によくぶつかるようになった。私は少しずつ外を歩くのが怖くなっていった。

特にターミナル駅のコンコースが恐怖で、大勢の人が不規則に速足で動き回っている状況がまるで目の前で銃弾が飛び交っているように見えて、その場に立ちすくんでしまう事もあった。夜間はさらに見えにくく、一人では出歩けないようになった。

その後、会社にも就業エリアを絞るなど配慮はしてもらったが、通勤や外回りがなくなるわけではない。私としては定年前に何とか事務職へ異動してそのまま定年後も働き続けられるようにと思い社会保険労務士の資格にも挑戦したが、やっとの思いで試験に合格した時にはすでに 60 歳の定年を過ぎていた。結果、事務職への異動も叶わなかった。

仕事に限界を感じ始めてはいたものの、生活の保障もないまま会社を辞めるわけにもいかず定年後も再雇用で働くことにしたが、大きく賃金が減額になった上にいつ事故にあうかわからないまま仕事を続けていくのは苦行以外の何ものでもなかった。でも老齢年金が

受給できる歳になるまではこれしか道がないと半ばあきらめていた。

そんな時ふと、資格の取得で勉強した障害年金のことが頭をよぎった。

医師に相談すると、認定される可能性があると言われ、診断書を書くことを快諾してくれた。私は早速年金事務所に行って必要な書類を受けとり説明を受けた。勉強していたので障害年金の基本的なことは大方承知していた。まさか資格の勉強がここで役に立つとは思わなかったが、私は藁にもすがる思いで書類を揃え申請をした。

3 か月後、結果が届き、障害が認定され年金が受給できることになった。

送られてきた年金証書を見て私は胸に熱いものが込み上げてくるのを感じた。

それはお金をもらえるうれしさというより、自分の障害を理解してもらえたといううれしさに近いものだった。黙って寄り添ってくれる強い味方を得たような、そんな気がした。

受給できる年金額は生活するのに十分な額とはいえなかったが、それでも再雇用で大きく減額となった賃金より多い額だった。この時ばかりは今まで真面目に働いて保険料を納めてきてよかったと本気で思った。支えてきたから支えてもらえることを実感した。

障害年金を受給できるようになったおかげで、会社を辞めても何とか生活できる目途が立った。他に選べる道が無く苦慮していた私に障害年金が新たな選択肢を与えてくれたと思った。生涯現役を全うできないのは残念ではあったが、通勤や移動時の恐怖から解放される安堵感に比べれば、それに勝るものはなかった。

私はすぐに会社を辞めた。

退職後は、出来ることに限りがあるものの、せっかく取得した資格を活かして社会保険労務士会支部が社会貢献活動の一環として行っている小学生への年金の出前授業に年に数回、補助講師として参加している。

私はたまたま資格の勉強で障害年金を知ることができたからこそ今の生活につながったと思っている。知ると知らないでは大違いで、先入観のない若いうちから年金の正しい知識を身につけておくことは、先の見えないこれからの時代は特に大切だという思いで活動しているが、子供たちの元気な姿に毎回私の方が逆にパワーをもらっている。

年金の将来に様々な課題があるものの、これからの子供たちには年金の本質である「世代を超えた支え合い」の精神を継承して課題を克服していった欲しいと願うばかりだ。

病気で眼の視野は狭くなったが、障害年金が私の人生の視野を広げてくれたと思い感謝している。